

平成30年度サケ来遊状況及び令和元年度サケ来遊予測

令和元年6月11日
宮城県水産技術総合センター

1 平成30(2018)年度サケ来遊状況

2018年度は河川捕獲が14万尾、沿岸漁獲が88万尾で合計102万尾（対前年度比107%）となりました。また、沿岸での水揚金額は1,515百万円となりました（図1）。沿岸漁獲量については、全国では79,745トン*（対前年度比120%）、宮城県では2,452トン（同99%）となりました。

* 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 北海道区水産研究所調べ

来遊数(千尾) 金額(百万円)

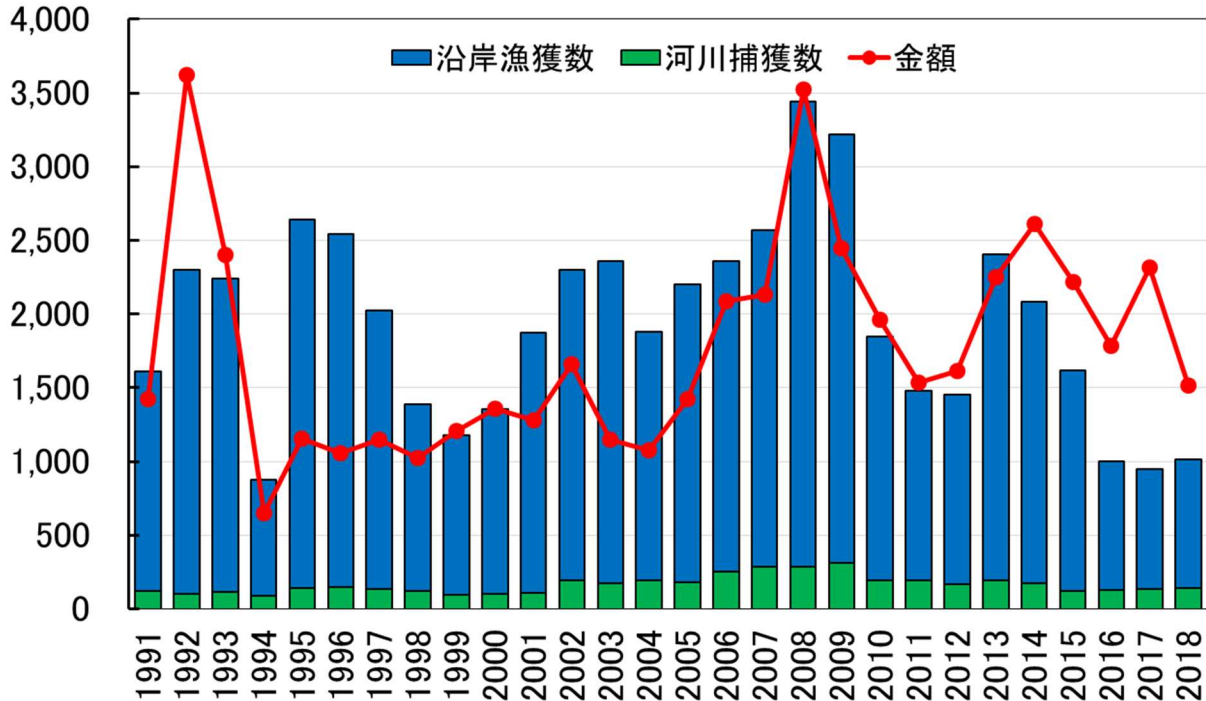


図1. 宮城県のサケ来遊数・水揚金額の推移

本県へのサケの来遊を年齢別にみると、4年魚が最も多く、次いで5年魚または3年魚が多い傾向にあり、2018年度もほぼ例年どおりの傾向となりました（図2）。その内訳は、4年魚が81万尾（対前年度比153%）と全体の80%を占め、次いで5年魚が13万尾（同50%）、3年魚が6万尾（同46%）、6年魚が1万尾（同30%）、2年魚が3千尾（同300%）となりました。

来遊数(千尾)

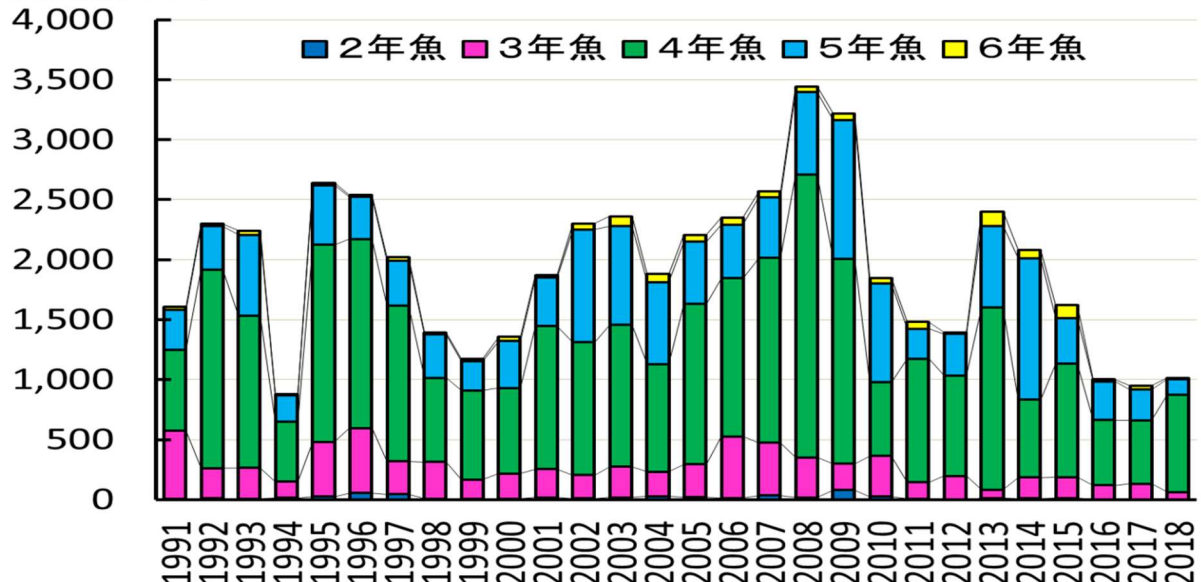


図2. 宮城県のサケ年齢別来遊数の推移

2 令和元（2019）年度サケ来遊予測

宮城県では2014年度から、国立研究開発法人水産研究・教育機構東北区水産研究所沿岸漁業資源研究センターと共同で「宮城県沿岸における秋さけ来遊数の予測手法の高度化」研究を実施してきました。この共同研究により、我が国周辺水域の漁業資源評価で、多くの魚種系群に用いられているコホート解析（資源量推定手法）をサケ来遊数の予測に応用した結果、2019年度は、92万尾（75～109万尾の範囲となる確率が約70%）と予測しました（図3）。

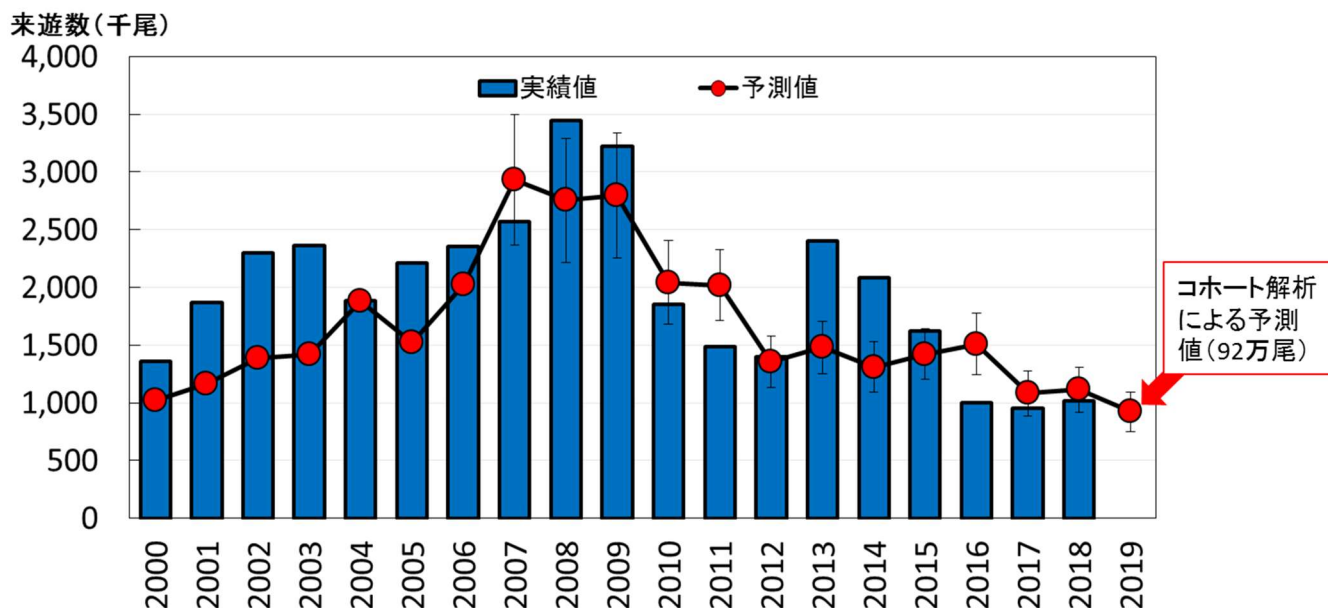


図3. コホート解析による来遊予測値と来遊実績値の推移

2019年予測値：来遊数92万尾（75～108万尾の範囲となる確率が約70%）
図中のバーは推定誤差を示す。推定誤差は成熟率の分散を用いてシミュレーションにより推定した。

2019年度の予測値92万尾は、2000年度以降来遊の最も少なかった2017年度の実績値95万尾と同程度であり、2000～2018年度の平均値197万尾との比較では、47%となっており、来遊数は低水準と予測されますので、引き続き来遊状況を注視するとともに、計画的な種卵確保と健苗の育成が重要になると考えられます。

*本県のサケ来遊は秋季の沿岸海況にも影響を受けます。海況の予測については、国立研究開発法人水産研究・教育機構 東北区水産研究所が今後、発表する情報等を参考にしてください。

東北区海況情報 <http://tnfri.fra.affrc.go.jp/kaiyo/kaiyoubu/predict/index-j.html>